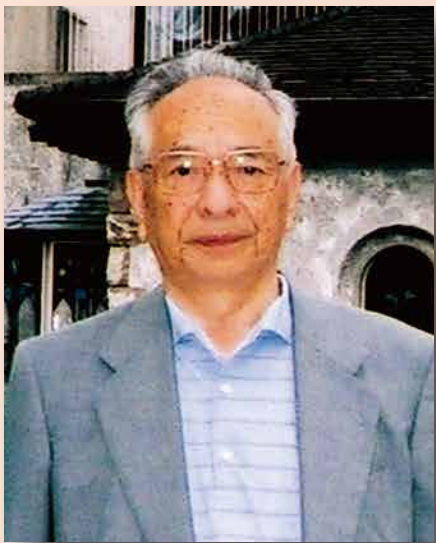


俳句

な かわら せき しゅう

中村石秋

下関市
(1923～2014)



【著作】

句集『風速計』（昭和39・其桃発行所）
『明日の俳句』（石原八束他共著）
（昭和40・秋発行所）
句集『新樹風』（平成28・現代俳句協会）

中村石秋（本名清治）は、大正十二年（一九二三）鹿児島県指宿市に生まれる。父は廻船問屋を営み、鹿児島と指宿の生活物資を運ぶ仕事をしていた。山も海も身近にある自然豊かな生活環境により、小動物好きの鋭敏な詩的感覚が培われたのであろう。

その後、長崎高商（現長崎大学）に進むと、校内の「緑風会」に入り、当時は俳号「赤秋」と称し俳句活動を始めた。四年先輩に森澄雄氏がいた。

昭和十八年に入隊、終戦を満州で迎えてシベリアに送られ、抑留生活を送る。

昭和二十二年に復員、大洋漁業に復職。昭和二十六年職場の句会に入り、当時、句会を指導していた西尾桃支と出会い「其桃」に入会した。昭和三十三年に「其桃」年間賞を受賞。その後、「其桃」編集に参画、辛島睦子、石井康久等と中心的な役割を果たす。石原八束、金子兜太の講演も墨直し大会の時にあった。

昭和三十九年に句集『風速計』を発刊。西尾桃支、石原八束の二人の序文もある。その後、東京へ転勤となり、「秋」の句会で俳句活動を続ける。

昭和五十三年（一九七八）に「其桃」主宰西尾桃支が逝去、子息の西尾豊（医師）が主宰を継承する。その間、「其桃」と「秋」両方で俳句活動を続ける。

昭和六十二年に下関へ帰り、「其桃」で本格的に俳句活動を再開し、平成元年（一九八九）、西尾豊より継承して、「其桃」主宰に就任する。

平成七年、山口県現代俳句協会副会長となり、平成十三年には山口県俳句作家協会会長に就任し、亡くなるまでそれぞれの役職を務め、山口県の俳句界のために尽力した。その間、五年毎に発刊する合同句集『桃影』も五回発刊した。

平成二十五年（二〇一三）には、文部科学大臣表彰の「地域文化功労賞」を受賞。「其桃」主宰として二十五年間、俳誌『其桃』を発行し続け、山口県の俳句界、地域文化の発展に尽力して、平成二十六年（二〇一四）五月十九日に逝去した。

その後、平成二十八年に、遺句集『新樹風』が発刊された。

（文・池田尚文）



「地域文化功労賞」受賞時



色紙・句集

中村石秋 年譜

（提供・池田尚文）

11月26日鹿児島県指宿市生まれ。

長崎高商（現長崎大学）の校内「緑風会」に投句。

四年先輩に森澄雄氏。

入隊。満州で終戦を迎え、シベリアで抑留生活。

復員。大洋漁業に復職。

職場の句会に入り、当時句会を指導していた西尾桃支先生に出会い「其桃」に入会。

「其桃」年間賞受賞。

桃支先生と石原八束先生の二人の序文の句集『風速計』を発刊。その後、東京勤務となり、「秋」の句会に出て、俳句活動を続ける。

東京から神戸に転勤。この年、西尾採菊夫人逝去。

西尾桃支先生が逝去。西尾豊先生が主宰を継承。

神戸より下関に帰る。

1月より「其桃」を西尾豊先生より継承。主宰となる。

『其桃』創刊六十周年記念、『桃影』（第七輯）を発刊。

山口県現代俳句協会副会長に就任。

『桃影』（第八輯）発刊（65周年）。

山口県俳句作家協会会長に就任。

『桃影』（第九輯）発刊（70周年）。

『桃影』（第十輯）発刊（75周年）。

『桃影』（第十一輯）発刊（80周年）。

文部科学大臣表彰による「地域文化功労賞」受賞。

4月末に検査入院。その後、5月19日逝去。

遺句集『新樹風』発刊。

― 代表作 ―

風速計夜に入り月の風はかる
たんぽぽに降りて転轍手は身軽
棒鰯の荒縄掛が糺られゐる
あざさゐの毬にささりぬいなびかり
蜥蜴出てするすると陽の縞を織る
散華札貼ればほとけや河豚供養
悔一つ吊り冬枯のキウイ棚
野葡萄や少年森に秘密持つ
不知火や櫓臍のきしむ父の海
龍の玉手を入れ森の日をさがす
地の湿り吸ひては群るる黒揚羽
船笛を詰め込んでゐる蟬の穴
枯菊を焚くや人語を投げ入れて
豆をむき海のひかりを押し開き
冬野来て刺ぼうぼうと身に生ふる
赤らみて海光群るるさくらんぼ
花筏海の蒼さへ発ちにけり
昨日かくあり今日かくありぬ新樹風

句集『風速計』・句集『新樹風』より